



Title	「チノイ」をめぐる想像と挑戦：中国系フィリピン人とフィリピン国民国家の関係をめぐって
Author(s)	宮原， 暁
Citation	社会人類学年報. 1997, 23, p. 125-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「チノイ」をめぐる想像と挑戦

——中国系フィリピン人とフィリピン国民国家の関係をめぐって——

宮原 曉

導言

一九九四年八月二〇日と二一日の両日、マニラ近郊の観光地
タガイトにて、「第一回中国系フィリピン人全国会議 チノイ
——変化への対応と挑戦」と銘打たれた会議がフィリピンの各
地から一〇四名の参加者（スタッフを除く）を集めて開催され
た。この会議が画期的であったのは、参加者の多くが商店の経
営者や華人学校の教師、学生など、どちらかというと中国系フィ
リピン人問題を専門とはしていない人々であったことに加え、
「チノイ」という新たな自称の下に、中国系フィリピン人をフィ
リピンの「エスニック・グループ」の一つとする視点が示され
た点にあると言える。

ラモス政権三年目にあたる一九九四年は、折から中国系フィ
リピン人をターゲットとした財物強要事件や営利誘拐が多発し

た時期にあたっていた。そうした状況下で、「フィリピン国籍の
取得」といった中国系フィリピン人の法的地位を中心に論じら
れてきた従来の「国民統合論」は、方向修正を余儀なくされる。
未だ払拭され得ない根深い反華感情とは表裏の関係にあるフィ
リピン・ナショナリズム、さらには国民国家のあり方そのもの
と向きあわざるを得なくなってきたのである。今回の会議も、
そうした潮流の中にある。

こうして本報告では「第一回中国系フィリピン人全国会議」
の諸議論を、配付資料や機関誌「トゥライ」(Tulay)の記事、
さらに筆者自身が会議に参加して観察したことをもとに再構成
し、そこで模索される中国系フィリピン人とフィリピン国民国
家の関係の方向性を明らかにしようとする。そうすることで「ネ
イティヴ」もしくは「土着性」といった概念に基礎を置く国民
国家のイデオロギーと、移動性にその存在の根拠を持つ中国系

フィリピン人を対比的にとらえ、そのなかに両者の関係を見い出そうというのが本報告のねらいである。

なお本報告では、「中国系フィリピン人」という語を用いて考察の対象に言及することとする。このような人々の呼称としては「華人」の語が一般的であるが、「華人」の語には「中国志向を持つ」「華僑」と区別し、現地（この場合、フィリピン）志向を強調する」といった、国民国家に対する政治的スタンスがあらかじめ含意されている。そのため本報告では、「中国系フィリピン人」の概念をさしあたり「歴史のある段階で中国大陸からフィリピン諸島に移り住んだ中国系移民、およびその系譜上の子孫で、国籍のいかんを問わず、今日、中国系として自他ともに認める人々」[cf. MCCARTHY 1974: 1]と規定したうえで、今回の会議の主体であり、かつ議論の対象となっている人々に言い表したいと思う。

本報告での考察の対象は中国系フィリピン人全体であるとは言え、一〇四名が参加者した会議から、八〇万から九〇万人（全人口の約一・五パーセント）[ANG-SEE 1990: 1]といわれるフィリピンの中国系住民の意識を一般化するには無理がある。とりわけ主催者団体および会議の参加者が比較的若い世代の中国系フィリピン人によって構成されていることは注意を要する。中国系フィリピン人社会では、世代間の対立が内部の政治に少なからず影響を与えることが知られている [eg. OMOHUN-DRO 1981: 115]。このため会議に対する上位世代の反発は充分に予想されるからである。

一 国民統合論の系譜とカイサ

今回の会議は菲律濱華裔青年聯合會 (*Kaisa para sa Kaunlaran*, 以下、「カイサ」とする) の呼びかけによって行われた。カイサは、一九八七年八月二七日に、「中国系フィリピン人とフィリピン人の相互理解を促進し、国民国家としてのフィリピンを再構築すること」を目的として、主にマニラ在住の若い世代の中国系フィリピン人が集まって設立された非政府系団体である [KAISA PARA SA KAUNLARAN, INC. 1992]。カイサの活動は中国系フィリピン人に関する調査・研究をはじめ、機関誌「トゥライ」の発行、タガログ語と福建語による子供向け番組「濱」の制作、フィリピン人を対象とした職業訓練など多岐にわたっている。これらの活動を通じてカイサ（およびその前身であるバグカカイサ・サ・バグウンラッド *Pagkakaisa sa Pag-unlad*, 一九七一年結成）はフィリピン国民としての中国系フィリピン人の地位向上に尽力し、国民統合をめぐる議論をリードしてきた。国民統合をめぐる中国系フィリピン人の立場をフィリピン社会向けに発信するほぼ唯一の言論機関として、カイサはその活動を通して、よくも悪くもフィリピン人が中国系フィリピン人を判断する材料を提供してきたのである。こうして本節では、まず国民国家と中国系フィリピン人との関係をとらえる視点を、東南アジアの国民国家と中国系住民に関する戴の議論に依拠しつつ提示した後に、カイサおよびバグカカイサの議論を中心とした国民統合論の系譜をフィリピンにおける国民

家の発展との関連で振り返ってみることにする。

本報告で言う「中国系フィリピン人」、すなわち今日、中国系として自他ともに認める中国系フィリピン人の多くは、スペイン統治期の一八五〇年、マニラ政庁が中国人招募政策に転じたのに呼応して、中国大陸の福建・広東地域からフィリピン諸島に來航した移民およびその子孫である。フィリピン諸島には、このような中国系フィリピン人の他に、一九世紀半ば以前に中国大陸から來航し、今日、すでに中国系としてのアイデンティティを失っている中国系の人々が存在している [WICKBERG 1964: 62]。両者の区別は、移民年代や規模の違いもさることながら、前世紀末の「フィリピン人の發明」以降、フィリピン・ナシヨナリズムとどう関与したかという決定的な違いに基づいている。すなわち、一九世紀半ば以前の中国人の子孫たちがフィリピン・ナシヨナリズムの一翼を担ったのに対して、一九世紀半ば以降の中国系移民の子孫たちは、ある種フィリピン・ナシヨナリズムにとつての敵役となってきたのである。

このように中国系フィリピン人がフィリピン・ナシヨナリズムの敵役として非中国系住民の怨嗟の的となった例は、一九世紀末以降、枚挙に暇がない。例えば、一九二四年には「上海でフィリピン人が殺害された」との噂に端を発し、マニラやバナトゥアンを中心とした大規模な反華暴動に発展した十月暴動 [陳 一九八九: 二二—二四、Jensen 1956: 64]、一九三一年には、中国系フィリピン人店主とフィリピン人客の口論に端を発したサン・パブロ暴動 [Jensen 1956: 65] が発生している。

一方、一九四六年にフィリピンが独立すると、フィリピン・ナシヨナリズムの担い手として、政府が反華的な政策を実行していくようになる。一九四八年の公共市場国民化法、一九五四年の小売業国民化法、一九五九年のフィリピン・ファースト・ポリシー、一九六〇年の米・トウモロコシ関連業種国民化法などの経済ナシヨナリズム政策は、まさにその現れである [Aycunã 1969: 87-91]。また一九五二年二月二十七日には、「禁備案」として知られる中国系フィリピン人をターゲットとした共產主義被疑者の一斉検挙事件が発生したが、この事件で検挙された三〇九名の中国系フィリピン人のなかには、國民黨の支部長なども含まれており [The Cebu Daily News 1952/12/28 2]、事件の性格として、「反共というよりは反華ナシヨナリズム的な色彩が濃いものと言える」。

中国系フィリピン人がフィリピン・ナシヨナリズムの敵役となってきた背景には、国民と国家を排他的に結びつける国民国家のイデオロギーが深く関与している。すなわち本来、人々の自由な往来を許容する地理的広がりや政治的に意味を持つ「地」となり、特定の人間集団の歴史的連続性ないし文化の表象としての「血」と結びつくことで、国民国家が虚構として成立するのである。東南アジアにおける中国系の国民統合を論じた戴は、ヨーロッパ近代に起源を持つ国民国家を、「民族と国家あるいは文化と政治を必ず一致させなければならないという命題に基づいて成立する」としたうえで [戴 一九八〇: 二二]、「中国系住民をよそ者として憎悪する、ネイティヴ側の複雑な心理」を

指摘している「同上書・二〇―二二」。国民国家における「血」と「地」の結合は「ネイティヴ」というその地域における特権的な存在を生み出し、中国系住民のように過去の移民にその端緒を持つ人々を排除するのである。

中国系フィリピン人をめぐる国民統合論が、国民国家の中にフィリピン国民としての中国系フィリピン人を位置づける議論だとすれば、その系譜は個々の国民統合論が国民国家における「血」と「地」の結びつきをどうとらえ、そのなかに中国系フィリピン人をどう位置づけようとしてきたかをめぐって、その変遷をたどることができる。戴は中国系住民の国民統合論を裏切るものにするための提言として、「政治的アイデンティティと社会的アイデンティティ、文化的アイデンティティを一応切離して考え、その後で個人的には統合・再構成すること」が必要であると主張している「同上書・二三」。ここでの「政治的アイデンティティ」とは「その土地に生まれ育つこと」を要件として構成されるものであり「同上書・一七、二三」、「社会的、文化的アイデンティティ」とは「個人の持つ『民族性』や『生まれ』、もしくは『血』に起因するものである」と整理できる「同上書・九、一〇、二三」。次に、戴のこの区別を援用しつつ、個々の国民統合議論がいかに国民国家における「血」と「地」の結びつきをとらえ、そのなかに中国系フィリピン人を位置づけてきたかを見ていくことにしよう。

国民国家のイデオロギーが国家統治のイデオロギーとなる以前の西、米両植民地統治期において、中国系フィリピン人は米

期における中国系移民制限や反華暴動はあったものの、植民地に去来するコスモポリタンとして、基本的に諸島の他の住民と同等の地位を満喫していた。⁽⁸⁾ 中国系フィリピン人が非ネイティヴとして国民国家の周縁に位置づけられるようになったのは、一九四六年にフィリピンが独立し、ナシヨナリズムが昂揚して以降のことである。いわゆる「同化論」が中国系フィリピン人の国民統合をめぐる議論のうち、最も初期のものとして登場するのもこの時期である。

こうした同化論は、「中国系フィリピン人が文化的、社会的、生物学的にフィリピン国民の主流に同化している」、あるいは「そうすべき」であると主張する。例えば、フェリックスは「中国系フィリピン人がフィリピン社会に同化することで中国問題はなくなる」としている[Felix 1966: 30]。一九五〇年代、六〇年代のフィリピン・ナシヨナリズムは、国民と国家、あるいは「地」と「血」を排他的に結合させ、「ネイティヴ」という虚構を産みだした。そうした政治状況のなかで、中国系フィリピン人は少なくとも表面上、彼らの社会的、文化的アイデンティティを放棄し、フィリピン国民の主流に同化していく道を選ばざるを得なかったのである。

その後、一九六〇年代の半ばにマルコス政権が成立すると、同化論に代わって「華人論」とでも呼ぶべき議論が台頭してくる。それまでの同化論がフィリピンという「地」とフィリピン国民という「血」の排他的な結合を前提としていたのに対して、華人論は地縁主義的な視点から中国系フィリピン人のフィリピ

ン国民としての政治的アイデンティティを、個々人の文化的、社会的、生物学的背景から分離することに成功している。この華人論の主要な担い手となったのが、カイサの前身であるバグカカイサである。

例えば、バグカカイサは一九七一年のマルコス政権下における新憲法起草に際して、他の中国系の団体とともに、フィリピン国籍の要件として、フィリピンで出生した者に国籍を与える出生地主義 (*ius soli*) を採用するよう強く政府に働きかけた [McCarthy (ed.) 1974: 283]⁹⁰。またバグカカイサの副会長であるベルナルド・ゴは、「ピンシノ」(*Pinino*) という呼称を提唱することで、中国系フィリピン人の文化的特殊性を認めただうえて、彼らの政治的アイデンティティがフィリピンにあることを主張している [Go 1974: 389]⁹¹。

一九六〇年代後半以降の華人論が中国系フィリピン人の政治的アイデンティティと社会的、文化的アイデンティティの分離に成功した背景には、マルコス政権下での文化的多様性の許容があげられる。一九七三年には、イメルダ大統領夫人の肝いりで、文化的多様性の象徴としてのマニラ中華街美化計画が行われた [周 (主編) 一九九三: 四六]。また一九七五年には、中華人民共和国との国交樹立を前に、中国系フィリピン人のフィリピン国籍取得手続きが大幅に簡便化された。このような国民国家における多様性の許容は、フィリピンという「地」が特定の「血」と排他的に結びつくのではなく、多様な「血」(但し一つの国民)と結びつくことを意味している。華人論が中国系フィ

リピン人の政治的アイデンティティを「血」の問題から切り離して論じ得たのも、この時期のフィリピン国民国家が文化的多元主義を包摂したことによると考えられる。

一九七五年の大量帰化政策によって、国民国家における中国系フィリピン人の法的地位が保証されたことで、国民統合論は一時期停滞する。しかし華人論によるフィリピン国民としての政治的アイデンティティの確立は、中国系フィリピン人の社会的、文化的アイデンティティ、すなわち「血」の問題に関して明確な方向性を示し得なかった。こうした華人論の不足を踏まえて登場したのが一九八七年に設立されたカイサによる国民統合論である。バグカカイサのかつてのメンバーであり、カイサの主要な論者でもあるテレシタ・アン・シーは一九七五年以降の中国系フィリピン人の政治参加を「必ずしもエスニック・チャイニーズとして政治に参加していったわけではない」と評して 32 [ANG-SEE 1994: 143]。そのうえで社会的、文化的アイデンティティの危機的状况を指摘し、「中国系フィリピン人とフィリピン人の間の文化的な差異や社会的距離を認めたところに、中国人問題の恒久的な解決も可能となる」と述べている [Ibid.: 146, cf. ANG-SEE 1990: 6]。

カイサの国民統合論では、中国系フィリピン人のフィリピン国民としてのあり方を模索するばかりでなく、アイデンティティや文化の継承をも議論の対象としている。カイサの信条の英語版の冒頭には、「フィリピンは私たちの国であり、私たちが生まれた土地 (*land*) であり、私たちの家である。私たちの血

は中国系の血 (blood) かもしれないが、私たちの根はフィリピンの土 (soil) に深く根をこめてゐる」としてゐる [KAISA PARA SA KAUNLARAN, INC. 1992]。また中文版では、「東方の真珠には、このような人がある。身体の中には黄帝の子孫の血（炎黃の血統）、すなわち漢族を表す血が流れている。しかし、彼はすでにその地に新しい根を張っている」としている [ibid.]。こうしてカイサによる国民統合論は歴史的連続性ないし文化の表象としての中国系フィリピン人の「血」を、フィリピン人の「血」と同化することなしに、フィリピンという「地」に結びつけようとする企てと見ることができ、カイサ主催による今回の会議の本質も、このような国民国家における「血」と「地」の関係の問い直しの中にあると理解することができる。

二 会議の概要

「第一回中国系フィリピン人全国会議」は、フィリピンの各地から一〇四名の参加者を集め（カイサのスタッフを除く）、一九九四年八月二〇日と二一日の両日行われた。二日間の会議の進行は以下の通りである。

まずカイサ会長ハリー・チュアの開会宣言と進行説明の後、会議のはじめのプログラムとしてフィリピン大学のランディ・ダヴィット教授による講演が行われた。この講演では前近代的なフィリピンの政治・経済構造を变革するうえで、中国系フィリピン人が果たすべき役割についての展望が示された。

ダヴィット教授の講演に続くセッションでは、主催者による

会議の問題提起がなされた。そこでカイサのスタッフであるゴ・ボン・ファンとテレシタ・アン・シーの両氏は、「いかに中国系フィリピン人はフィリピン国民を構成するエスニック・グループたりえるか」との問題を提起し、「チノイ」という中国系フィリピン人の新たな自称を提唱した。

また一日目の午後には、中国系フィリピン人を取りまく各地の状況に関する報告が、参加者の居住地ごとに八つの部会（ミダナオ、ビサヤ、ルソン〔二部会〕、マニラ首都圏〔四部会〕）に分かれておこなわれた。それによると「地域社会における確固たる信頼が、各地の中国系フィリピン人の経験の肯定的な側面」であるという。一方、否定的な経験としては、中国系フィリピン人に対する否定的イメージ、政府役人などによる嫌がらせや財物強要や誘拐事件の多発、さらに一般市民による揶揄が報告された⁽¹⁾。

各地の現状報告の後、一日目の最後のプログラムとして、中国系フィリピン人の歴史に関するスライドが上映された。ここでは「フィリピン出土の宋代・元代の陶器分布地図」や「中国ジャンク」、「スルー王墓碑に記された「故蘇祿國恭定王墓」の文字」、「天秤棒を担ぐ弁髪（べんぱ）の男」、「一八九八年のフィリピン革命の担い手たち」などのフィリピン史における中国系住民の足跡が紹介された。

初日に比べて参加者どうしもうち解けた会議二日目の午前中の討論では、一、「チノイ」の位置づけとしていかなる変化を望むか、二、フィリピン社会のなかで「チノイ」はいかなる役割

を果たし得るか、三、もしラモス大統領がこの場にいたとしたら望みたいこと、の三点が、新たに通地域的に再編成された作業部会を通して議論された。以下の文章は、これら三つの議題に関して最終的に文章化され、その場で参加者に配布されたものである（／は原文での改段位置を示す）。

(一) 望むべき変化 私たちは「チノイ」が外国人としてではなく、「フィリピン」(フィリピン国民)として、社会の主流の一部を担うことを望む／私たちは他の「フィリピン」との交流をより積極的に拡大していくべきである。と同時に、私たちは私たちの中国文化を、ためまぬ努力によって継承していかねければならない。とりわけ私たち若い世代にとってはそうである。また、私たちは私たちのユニークな文化伝統を、他の「フィリピン」と分かち合い、多元主義の概念を確立していかねければならない／フィリピン社会を構成するすべての部分は、相互に尊重し、理解を深めていかなければならない。「フィリピン」と「中国人」の間の差別は、払拭していかねければならない／私たちはともに汗を流し、ともに成長していくコミュニティに結集しなければならぬ。全国に広がる「チノイ」のネットワークは、フィリピン社会の主流において、より大きな声となることを意味する。

(二) 果たすべき役割 「チノイ」は社会の重要な構成員である。私たちは、この国にこそ私たちの最大の関心があることを示すべく、模範的な「フィリピン市民」とならなければならぬ

い／私たちは社会的に、また政治的にも、様々な民間の団体に、メンバー、もしくはリーダーとして、より積極的に関わっていかなければならない。私たちはフィリピンにより多くの投資をおこない、他のフィリピンと専門技術を分かち合い、雇用を創出していくことで、社会に大きく貢献する成員となり得る。

(三) ラモス大統領に望むこと ラモス大統領は「チノイ」がフィリピンの発展にきわめて重要な役割を果たしていることを認識すべきである。国家の財産として「チノイ」の潜在能力を引き出す環境を整えることは、ラモス大統領の責務である／その手始めとして、大統領は中国系フィリピン人の帰化に関して、再度、きちんと対処することが望まれる。そうすることで、いまだ法的にフィリピン国籍を取得できないでいる「チノイ」が彼らの望むフィリピン市民の地位を獲得することができる／また、大統領は治安と秩序の回復に向けて政治的に強固な意志を持つべきである。さらに汚職と腐敗を一掃し、中国系フィリピン人に対する政府の役人のいやがらせやゆすりをやめさせなければならぬ。

中国系フィリピン人の位置づけと役割をめぐる討論の後、二日目の午後には会議全体の締めくくりが行われた。そこでは歴史博物館や非中国系フィリピン人向けの技術専門学校の建設などの具体的な活動方針が確認されるとともに、中国系フィリピン人をフィリピンにおけるエスニック・グループの一つとすることに關して、政府の認知を求めるか否かが議論された。白熱

した議論の応酬の末、結局、この問題は今後の検討課題とされ、最終的な行動計画の文案からは削除される。以下に掲げる文章は、こうして策定された会議の行動計画の要約である。⁽¹⁶⁾

一、私たちは中国系の血をひくフィリピン人である。しかし、私たちの根はフィリピンの土壌に張っており、フィリピン国民との間にこそ、私たちの結びつきはある。私たちは中国の豊かな文化的伝統の継承者であることを誇りに思う。そして、そうした文化的伝統を守り、他のフィリピンとの間に共有していきたいと思う。

二、私たちはフィリピンこそが、私たちの未来の世代が生きていく土地であると考える。私たちは、他のフィリピン人とともに、国民国家が直面する社会、経済、政治面での種々雑多の問題を認識し、これらの問題の解決に身を捧げる覚悟である。

三、私たちは、フィリピン社会に欠くことのできない要素として、私たちが国民国家の建設に果たすユニークな役割と潜在能力を自覚している。私たちはこの潜在能力を存分に発揮しようと思う。

三 「チノイ」をめぐる想像と挑戦

「第一回中国系フィリピン人全国会議」のプログラムのなかで、中国系フィリピン人とフィリピン国民国家の関係の方向性が明確にうち出されているのは、一、ダヴィット教授の講演、二、主催者による問題提起と「チノイ」という自称の提唱、三、

中国系フィリピン人の位置づけと役割をめぐる討論の箇所である。以下では、これら三つの箇所でなされた議論を、先に示した国民国家における「血」と「地」の結びつきの観点から検討することで、中国系フィリピン人と国民国家の関係づけをめぐる議論の方向性を明らかにしてみたいと思う。

1 「血」と国民国家

「私のミドル・ネームはションコ (Sison) です。母方の何代か前の祖先は、純血の中国人でした」。講演の冒頭、ダヴィット教授はそう言つて話を切り出した。氏は「中国系として自己ともに認めていない」という意味で今回の会議の参加者と同じ意味での中国系フィリピン人ではない（氏は何代か前の祖先の「血」には言及するものの、彼自身の「血」については何も言っていない）。にもかかわらず、氏が中国系の「血」に言及したのは、国民国家の枠組みを越える中国系の「血」の広がり、旧態依然としたフィリピンの政治・経済構造を変革し得る可能性を見出したからに他ならない。

今日、中国系住民をとりまくフィリピンの政治・経済構造には、少数の家族による政治支配やリース・エコノミーの体質などの旧来の悪弊⁽¹⁷⁾が依然として残されている。そうしたなかにあつて、中国系フィリピン人は経済面での目覚ましい活躍にも関わらず、フィリピンにおける政治・経済構造の悪弊に対してほとんど何ら抵抗せず、かえつて前近代的な政治・経済構造や偏狭なナショナリズムの存続に手を貸してきた。こうして政

治・経済構造や家族、国民国家の近代化を促すためには、東南アジアの華人の一部として、本来的に国民国家の枠組みを超越するネットワークを持つ中国系フィリピン人が従来の政治的無関心を脱却する必要がある、そうすることで中国系フィリピン人と非中国系フィリピン人のよりよい関係を構築することも可能となるとというのが講演における氏の主張である。

中国系フィリピン人の国民統合をめぐるこれまでの議論は、同化論であれ、華人論であれ、いずれも中国系の「血」を国民国家の枠組みの内部に位置づけようとしてきた。これに対して教授の議論は中国系の「血」と「地」の関係を逆転させ、中国系フィリピン人を国民国家の呪縛から解放放つている。もちろん、いわゆる「近代」が「血」を超越したところに発生し、国民国家が近代の副産物であるとすれば、教授の言う「血」への回帰が果たして真に国民国家を超越する論理となるか否かは、疑念なしとは言えない。しかしながら、従来の国民統合論においてどちらかというとき定的な意味あいを担わされてきた中国系の「血」に、氏が積極的な意味を与えたことは、フィリピン・ナショナリズムや国民国家のあり方そのもののへ本質的な問いかけがなされている点で、十分に評価すべきである。

2 自称としての「チノイ」

ダヴィット教授が中国系の「血」に国民国家の枠組みを越える可能性を見出しているのに対して、ゴ・ボン・ファン、テレシタ・アン・シー両氏による会議の問題提起では、「いかに中国

系フィリピン人は多民族国家としてのフィリピンを構成するエスニック・グループたりえるか」という問いのなかに、中国系フィリピン人と国民国家の関係をとらえようとしている。そこで鍵となっているのが、「チノイ」という中国系フィリピン人の新たな自称である。

「チノイ」とはフィリピン語で「中国系フィリピン人」を表す「チノン・ピノイ」(Tsinong Pinoy)の略であり、「中国系フィリピン人」をフィリピン国民の一部とする運動のなかで、一九九二年にカイサが考案した呼称である。¹⁹⁾ これまでにも「フィリピン国民としての中国系フィリピン人」を表す自称には、「華人」や「チャイニーズ・フィリピン」(Chinese Filipino)、「ピンシノ」(Pinsino)などの語が提唱されてきた。²⁰⁾ しかし、語の持つ意味のみならず、ニュアンスや気分、語呂をも含めれば、「チノイ」にまさるものはない。人々のエスニック・グループとしての意識が、その主体的的確な自称によって喚起されるとすれば、「チノイ」という自称は、中国系の「血」を継承するエスニック・グループとしての中国系フィリピン人の存在を会議の参加者に確信させ得ているのである。

このようなエスニック・グループとしての「チノイ」は、フィリピンにおける固有の歴史を与えられることで、国民国家もしくは多民族国家の中に位置づけられる。会議初日には、中国系フィリピン人の歴史に関するスライドが上映されたが、そこでフィリピン史における中国系の足跡として紹介されたフィリピン諸島に陶器をもたらした中国系の貿易商人、スルー王家、フィ

リピン革命の担い手たちの歴史は、厳密な意味で今日の中国系フィリピン人の歴史ではない。「中国系フィリピン人の歴史」といった場合、各時代ごとに「中国系フィリピン人」を定義することはできても、連続する時間のなかで「中国系フィリピン人」を定義することは不可能である。しかし、「歴史が生物学的な血ではなく、「特定の人間集団の歴史的連続性、ないし文化の表象」として先に筆者が規定したような「血」によって語られることで、各時代に何らかの意味で「中国系フィリピン人」であった人々は、その後の歴史的発展過程や生物学的な血の継承とは無関係に、中国系フィリピン人、あるいは「チノイ」の歴史に組み込まれる。こうした歴史の再構成を通して、「チノイ」は国民国家の発展過程の中に位置づけられるのである。

3 酒杯のなかの溶けない氷

「エスニック・グループ」としての「チノイ」をめぐる主催者側の理解がゴ・ボン・ファン、テレシタ・アン・シー両氏による会議の問題提起に示されているとすれば、それに対する参加者の理解は、二日目の討論のなかで、ある参加者が語った「酒杯中の氷」の喩えの中に現れている。イサペラ州でベイカリーを営むというその中年男性は、訥々とした、やや聞き取りにくい福建語で次のように語っている。

酒の入った杯に氷を入れると、酒は冷たくておいしい酒になる。しかし、時間がたつて氷が溶けてしまうと、酒はかえってまずくなる。同じようなことは「チノイ」についてもあてはま

る。「チノイ」は氷で、フィリピンの社会は酒である。「チノイ」は「チノイ」のままフィリピン社会のなかに置かれることで、フィリピン社会の味はさらにひきたつ。「チノイ」がフィリピン社会に溶けだしてしまうと、酒の味は損なわれてしまう。

「酒杯中の氷」の喩えのユニークさは、「文化的に異質な者どうしの境目をなくすことが、むしろ全体の調和を妨げる」という逆説を含む点にある。この点は、単に民族的な百花斉争を肯定するだけのサラダ・ボウル論にも見られない点である。フィリピンにおける中国系住民の国民統合は、長らく参入する側の中国系フィリピン人と受け入れ側としてのフィリピン社会という固定した図式のなかで論じられてきた。すなわち、中国系フィリピン人の国民統合論を「地」と「血」の関係づける仕方のなかにとらえようとする筆者の図式に従えば、国民統合する側をどうとらえようとも、国民統合がなされる先には「地」としての国民国家が想定されているのである。しかしながら中国系フィリピン人のフィリピンにおける国民統合がこのような図式をとる限り、そこには「図式の正しさにもかかわらず、フィリピン社会に受け入れられなかった場合、どうするか」という問題が本質的につきまとう。法的にフィリピン国民となること、中国系フィリピン人の歴史的正当性を主張することは容易である。しかし、同時にそれが国民国家を構成する他の人々の同意を得難いものであることも、中国系フィリピン人は感じ取っていると考えられる。こうした意味で、国民国家（「地」）の政治性を排除し、異質の文化（「血」）の並立状況を許容する「酒杯

中の氷」の喩えは、会議冒頭でのグウィット教授の議論と類似して、多くの中国系フィリピン人が受け入れやすい議論となっていると考えられるのである。もちろん喩えとして整っていることと、理論としての厳密性は別物であろう。しかし、この「酒杯中の氷」の喩えが会議の終盤に向けて、エスニック・グループとしての「チノイ」をめぐる議論の白熱を生み出したことは疑う余地がないのである。

結語

中国系フィリピン人を含めた東南アジアの中国系住民は、歴史的に移動のなかにあつた。そうした中国系フィリピン人は、植民地統治下のコスモポリタニズム的風潮のなかで、セブアノやタガログ、さらにアメリカ人やイギリス人、インド人ともにコスモポリタンの一員に数えられていた。しかしながら、このようなコスモポリタニズムとしての中国系フィリピン人の住民の地位は、ひとたびフィリピンに国民国家が優勢となることで一変する。そこでは多様性を許容するコスモポリタニズムが後退し、かわって国民と国家を排他的に結びつけるナショナリズムが台頭する。「ネイティヴ」という言葉がその地域における特権的な地位をさすようになるのもこの時期である。

そうしたなかで、移動性を生活の基盤としてきた中国系フィリピン人は、彼らの自律性を国民国家によって脅かされ、あるいは管理されるようになるのである。

もちろん、中国系フィリピン人の側もただ手をこまねいてい

たわけではない。一九六〇年代の後半から、七〇年代にかけての華人論のなかで、カイサの前身であるバグカカイサ・サ・パグウンラッドはフィリピン国民の要件を、「フィリピン人の『血』を持つこと」ではなく、「フィリピンという『地』に生まれ育ったこと」に求め、法的な面でフィリピン国民の地位を獲得することに成功している。また今回の会議において、主催者であるカイサは中国系の「血」を「チノイ」という自称によってとらえ、その文化と歴史をフィリピン国民国家の形成史に重ね合わせつつ、再構成することで、中国系フィリピン人がフィリピン国民たる正当性を主張している。

しかしながら、このような国民統合論は、それが「統合する側の中国系フィリピン人と受け入れる側のフィリピン社会」という固定的な図式に立脚する点で、議論の限界を否定できない。言い換えれば、国民統合論が出生や歴史を統合の要件とする点で、「地」と「血」の結合における「ネイティヴ」の特権的な地位を承認しているのである。

この点で会議の後半、「酒杯中の氷」の喩えが主催者側からではなく、参加者の側から提出されたことは興味深い。国民国家と中国系フィリピン人の関係をめぐる議論の中で、中国系の「血」はこれまでともすれば否定的な意味あいを与えられてきた。しかし、この喩えが中国系フィリピン人の国民国家内部での異質性を肯定的にとらえたことで、そうした「血」は中国系の人々の自律性を喚起し、国民国家を越える彼らの政治的アイデンティティに根拠を与えるものとして、新たな意味を獲得す

る。こうして中国系の「血」に基づく政治的アイデンティティの拡大は、その根底にある中国系の人々の「移動性」を、国民国家において「ネイティブ」もしくは「土着性」の概念が占める地点まで引き上げる。すなわち、「土着性」が特定の人々と土地を結びつける国民国家を産みだしたように、「移動性」は特定の土地と結びつかない人々に、新たな政治的アイデンティティを与え得るのである。

グヴィット講演に対する評価の箇所でも述べたように、「血」への回帰が果たして真に国民国家を超越する論理となるかいは、なお検討が必要である。しかしながら、台湾、香港、マカオの釣魚台防衛団体が尖閣諸島の領有権を一致して主張し、抗議船約四十隻を尖閣諸島に差し向けたといった現実を目の当たりにするとき〔毎日新聞 一九九六年十月七日付〕、中国系の人々の「血」の広がりがこれまでのものとは全く異なる国家の概念、民族の概念を人類学につきつける可能性も、今後充分にあると言えよう。

謝辞

今回の会議への私の参加はテレシタ・アン・シー氏の快諾によって実現した。会議中、ジェイムス・オン氏、ゴ・ボン・ファン氏ほか、カイサのスタッフの方々には何かと気を使っていた。一方、ペドロ・チュア氏、劉心欣氏をはじめ会議の参加者の皆さんからは、筆者が会議における議論を整理する上で、貴重な示唆をいただいた。また社会人類学年報編集部の高倉浩

樹氏、片上英俊氏、古川美緒氏の三氏からは、本報告をまとめるうえで貴重なコメントをいただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。

註

- (1) 原題は“First National Convention of Chinese Filipinos The Tsinoys : Responding to Change and Challenge.”
- (2) この点に関して、筆者の調査地であるセブにおける中年の情報提供者は、第一回中国系フィリピン人全国会議が若い世代のための会議であるとして不参加の意志を表明している。
- (3) 中国系フィリピン人社会にはカイサの他にも、菲華商聯總會（商工会議所）や宗親會（同姓組織）、同鄉會など数多くの団体が存在しているが、その活動は主に中国系フィリピン人社会内部に向けられている。
- (4) 一説によると、フィリピン全人口の二〇パーセントが、中国系の血をひくとされる。
- (5) 近年のものとしては、一九八七年のアン・ヘレス・デモや一九八八年のカバナトゥアン・デモが著名である。また米不足の際に、中国系フィリピン人の米穀商や精米業者に対する怒りが爆発することも多く、筆者がフィリピンに滞在していた一九九五年にも、米不足から、小規模な投石事件が発生している。
- (6) これらの反華暴動は、いずれも当局によって早期に鎮圧されている〔陳 一九八九、二二—二四、および JENSEN 1996 :

64]。

(7) この事件の処理過程では、三名が獄死、一四名が国外追放となり、最終的に九九名が釈放されるまでに、まる一〇年を費やされた〔周（主編） 1993：818〕。

(8) 例えば、一九二一年に植民地政府は簿記の言語を英語、スペイン語、現地語のいずれかとする法令を出したが、中国系フィリピン人はこの法令に対して「人種差別を禁じた憲法の理念に反する」として米国最高法院に提訴し、一九二六年に違憲判決を勝ち取っている〔陳 一九八九：一九一二〕。

(9) 同化論の論者としては、中国系フィリピン人学生の使用言語や文化的価値観、通婚に対する意識を調査したマクベス〔MCBEATH 1970〕、通婚を指標として中国系フィリピン人の同化を論じたレイノルドやアムヨなどの社会人類学者がいる〔REYNOLDS, H. R. 1964, AMYOT 1973：132〕。

(10) その後、出生地主義の採用要求は憲法起草委員会の多くの委員の支持を得ることに成功したものの、折から戒厳令によって頓挫せざるを得なかった〔ANG-SEE 1994：143〕。

(11) またマッカーシーは、「中国からフィリピンに渡った移民を祖先に持ち、中国文化の影響をうけ、中国系の言語を話し、中国系と自他ともに認める人々」を「エスニック・チャイニーズ」〔ethnic Chinese〕と規定し〔MCCARTHY 1974：1〕、「フィリピンに居住している彼らエスニック・チャイニーズにはフィリピン国籍を取得する権利がある」といふ〔ibid：24〕。

(12) カイサの信条（英語版）は次の通りである。

「フィリピンは私たちの国であり、私たちが生まれた土地であり、私たちの家である。私たちの血は中国人の血かもしれないが、私たちの根はフィリピンの土に深く根ざしている。

私たちの絆はフィリピンの人々との絆である。私たちは、私たちが私たちであることをもたらしてくれた多文化というものに誇りを持つ。他の人々と手を携えて、フィリピンの太陽の下に私たちの場所を見つけること、それが私たちの希望であり、望みである」〔KAISA PARA SA KAUKLARAN, INC. 1992〕。

(13) ランディー・ダヴィット教授は人気テレビ番組「パブリック・フォーラム」の司会をも務める社会学者である。

(14) 否定的なイメージに関しては、「党派的」「汚い」「騒がしい」「フィリピン人との結婚を忌避する」などのイメージが、政府の役人などによる嫌がらせや財物強要に関しては、役人たちが中国系フィリピン人を「ミルキング・カウ」〔milking cow〕として、何かと金銭を搾り取る実態が、また、椰櫚に関しては、“*insik baby*”（中国人の豚）を意味する）などの侮蔑語や“*Tan ta lang tan tan*”といったからかい文句（中国系フィリピン人の一般的な姓である「陳」〔Tan〕の音から派生している）。

(15) 会議で上映されたスライドは、Go, Bon Juan and TERESTA ANG-SEE (eds.), *Heritage : A Pictorial History of the Chinese in the Philippines*, 小さな冊子に収録され

らと Go, Bon Juan and Teresita Ang-See (eds.) 1987]。

(16) 行動計画の原文は6つの項目から構成されており、本文で省略した項目には「四、フィリピンにおける社会事業への積極的な参画」五、伝統的な価値観の復興とコミュニティ内部の協力、六、研究、出版を通じての相互理解の達成が盛り込まれている。

(17) ダヴィット教授によれば、フィリピンの方では「トラボ」(trabo)と呼ばれる伝統的な政治家たちが、選挙区での利権を一族と支持者によって王国的に支配しているとされる。

(18) 「チノイ」という呼称はカイサ成立五周年を記念した行事に際して、新たに考案された[KAISIA PARA SA KAUNLARAN, Inc. 1992]。

(19) 西氏によると、菲華商聯總會をはじめとした中国系フィリピン人の団体が団体の英文名称のなかで使用する“*Filipino-Chinese*”という語は、団体の保守的性格を示していることに加えて、英文法上の誤謬を含んでいるという。また、非中国系のフィリピン人が中国系フィリピン人に言及する際に使用する「インチック」(*Intsic*)という語は、本来の意味はともかく、侮蔑的なニュアンスが感じられるという。

参照・参考文献

AMYOT, Jacques 1973 *The Manila Chinese : Familism in the Philippine Environment*. Quezon City,

Philippines : Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.

ANG-See, Teresita 1990 *The Chinese in the Philippines : Problems and Perspectives*. Manila : Kaisa para sa Kaunlaran, Inc.

—— 1994 “Political Participation, Integration and Identity of the Chinese in the Philippines.” In Ang-See, Teresita & Go, Bon Juan (eds.). *The Ethnic Chinese : Proceedings of the International Conference on Changing Identities and Relations in Southeast Asia*. Manila : Kaisa para sa Kaunlaran, Inc. pp.139-148.

AZCUNA, Adolfo 1969 “The Chinese and the Law.” In Felix, Alfonso Jr.(ed.). *The Chinese in the Philippines, vol.2, 1770-1898*. Manila : Solidarity Publishing House. pp.75-95.

CARINO, Theresa C. 1994 “State Ideology, Policies and Ethnic Identity : The Case of the Chinese in the Philippines.” In Ang-See, Teresita & Go, Bon Juan (eds.). *The Ethnic Chinese : Proceedings of the International Conference on Changing Identities and Relations in Southeast Asia*. Manila : Kaisa para sa Kaunlaran, Inc. pp.149-155.

陳守國 一九八九 『菲律賓五百年的反華歧視』マニラ：菲

FELIX, Alfonso, Jr. 1966 "A Bold Answer to the Chinese Problem." *Solidarity* 1 (1) : 27-31.

GO, BON JUAN and TERESTA ANG-SEE (eds.). 1987 *Heritage : A Pictorial History of the Chinese in the Philippines*. Manila : Kaisa para sa Kaunlaran, Inc.

& Prof. Chinben See Memorial Trust Fund.

JENSEN, Khin Khin Myint 1956 "The Chinese in the Philippines during the American Regime 1898-1946." Ph.D. dissertation, University of Wisconsin.

KAISA PARA SA KAUNLARAN, INC. (ed.). 1992 *Tsinoy : A*

Grand Celebration of the Chinese in the Philippines in Music, Dance and Visual Images. Manila : Kaisa para sa Kaunlaran, Inc.

MCBEATH, Gerald A. 1970 "Chinese Integration in Contemporary Philippine Society." *The Annals of Philippine Chinese Historical Association* 1 : 71-89.

MCCARTHY, Charles J. "The Chinese in the Philippines." In McCarthy, Charles J. (ed.). *Philippine-Chinese Profile : Essays and Studies*. Manila : Pagkakaisa sa Pag-unlad, Inc. pp.1-82.

OMOHUNDRO, John T. 1981 *Chinese Merchant Family in Iloilo : Commerce and Kin in a Central Philippine City*. Quezon City, Philippines : Ateneo de Manila

REYNOLDS, Harriet R. 1964 "Continuity and Changes in the Chinese Family in the Ilocos Province, Philippines." Ph.D. dissertation, Hartford Seminary Foundation.

周南京 (主編) 一九九三 『世界華僑華人詞典』北京 : 北京大學出版社

戴國輝 一九八〇 『華僑——「落葉歸根」か「落地生根」か』の苦悶と矛盾』東京 : 研文出版

WICKBERG, Edgar 1964 "The Chinese Mestizo in Philippine History." *Journal of Southeast Asian History* 5 : 62-100.

《新聞》

Monthly Tulay : Chinese-Filipino Digest, Vol.7, No.4 (1994/9/5).

The Cebu Daily News (1952/12/28).
毎日新聞 一九九六年十月七日

(みまな・まち 大阪外国語大学・講師)